

国際シンポジウム「北東アジアの危機と岐路」

ERINA 調査研究部主任研究員

三村光弘

2018年1月27日、福岡市の九州大学西新プラザで、九州大学アジア太平洋未来研究センターが主催し、人間文化研究機構（NIHU）北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点と北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター境界研究ユニット（UBRJ）が共催する国際シンポジウム「北東アジアの危機と岐路」が開催された。

このシンポジウムは三部に分かれ、第一部が日本語による特別セッション「福岡で北朝鮮問題を考える」であり、筆者は九州大学の朴鐘碩氏、鳥根県立大学の高一氏、韓国・東西大学総長の張済国氏とともにパネリストを務めた。議論では、朝

鮮半島まで200キロしか離れていない九州の視点から現在の朝鮮半島の情勢を見る試みがなされ、その結果がよいものとなっても、悲惨なものとなっても900キロ離れている東京とは異なり、九州は大きな影響を受けることが認識された。しかし、九州にあっても国家対国家の問題を論ずるにあたっては、このような「近さ」を多くの人が意識的、無意識的に感じながらも、必ずしも議論の中に組み込まれるとは限らない現状が認識された。

セッションIとIIは日英同時通訳で行われた。「北東アジア：米中日露の角錐？」では、主に国際政治の観点から議論が行われ、この地域での協力が進まない理由

の一つとしての複雑な大国間関係について示唆に富んだ見解が示された。「北東アジアの未来を考える」では、より総合的な観点からこの地域の未来に関する議論が行われた。両セッションでは、普段研究を行っている経済以外の分野からの発言が多く、北東アジアの問題を理解する上で、学際的な研究プロジェクトや研究交流の機会をより多く持ち、総合的な観点からこの問題を論じる必要性を強く感じるとともに、国際関係をはじめとする他の学問分野の研究者たちに、経済の持つ力をうまく説明することができなかった筆者の力不足をも感じる、極めて貴重な体験となった。